

ら、イエスにとっての危機が始まるのです。

普通世間では、多く人々が集まって来ることを喜び、誇りとする。しかし、こと宗教に於ては、多く集まることは、その宗教の危機の到来を意味する。

宗教や信仰は、多くの集りの中にはない。組織や教理の中にはない。

今日、大集団となり、大組織となり、教理の域をきづいて立てる様々の宗教を見るがよい。彼らのどこに、始祖の生きたる宗教、信仰の生命を見ることができようか。あるのは馬鹿でかい建物と大集団と教理と権力、財力にしがみつく偽善者の一団と名誉に生きる偽教師たちだけである。

宗教は、組織とは無縁、大集団とは一切無関係なのであります。大きい建物とも関係ないのであります。

宗教は、信仰は、ただ個人と神との間にのみ存在し、そこに於てこそ、人間は人間となり、真の自主独立の正常人となるのであります。

「イエスは、王にされることを知って、ただひとり山に退かれた」とある。王になると

き、イエスは、イエスでなくなることをよく知っておられたのです。神とただひとり関わり、ただひとり神の恵みの中に立つ荒野（山）こそ、イエスの居場所であり、宗教の居るところであります。そして、この宗教こそ、人間にまことの平安をもたらすものであり、従って社会に平和を来らせ、家庭に幸いを生みださせ、健全なる文化を生み育てて行く原動力となるのであります。

26

「その教えを聞いて非常に悩みながらも、な
お喜こんで聞いていた」

（マルコ福音書 6章20節）

イエスの誕生の当時、ユダヤの王として支配していたのはヘロデ大王です。東から来た博士たちが、ユダヤ人の王として生れたキリストのイエスを探ね求めて大王の前に行った

とき、大王は己が地位について不安を覚え、イエス殺害の目的で、ベツレヘムの幼児をすべて抹殺するように命じました。彼は、この世の知慧にたけ、非常に残忍な行為の数々を行いました。この大王の第二子が、ヘロデアアンテパスと云って、イエスが十字架におかかりになるときに在世していた王であります。アンテパス王も父の血を引いて狡猾で放縦で、イエスは彼を孤と呼びました。

しかし、〃鬼の目にも涙〃の例え通り、自分の非を攻撃して止まぬヨハネを深く憎みつつも、ヨハネの語るところの正しさの故に、表記のごとく「悩みながらも、よろこんで聞いていた」のです。にもかかわらず、結果に於ては、ヨハネを捕え、自己の責任でないような形で殺害してしまふのです。(マルコ・6・21/29) 彼は、神と悪魔との間にあって、その思い心は、ゆれ動き、ついに悪魔に己れを渡してしまつたのです。彼は弱かつたのです。しかし、彼の弱さは同時に、私たち自身の弱さでもあるのです。

私たちは、彼ら親子ほどの残忍さ、狡猾さはなくても、それに近い何かをもっている者です。

人の罪は深く、そのエゴイズムは、どうすることもできません。正に、罪悪は深重です。手を合せて赦しを願うより他になすすべをもたぬ者が、わたしたち人間であり人生であります。

27

「わたしは、主のはしためです。お言葉とおりに、この身になりますように」

(ルカ福音書 1章38節)

「あなたは、身ごもって、男の子を産むでしょう。その子を、イエスと名づけなさい」
この神の声は、マリヤにとって、正に青天のへきれきでありました。

「どうして、そんなことがありますか」
マリヤは敬虔なユダヤ教徒であります。たとえ、それが神の霊によって、みごもったと

しても、私生児を産むなどということは絶対に承認しがたきことでありました。

世間はマリヤを、ふしだらな女として白眼視し、人々の信用を失って、その将来をだめにしてしまふにちがいありません。家族にも迷わくが及ぶことなど考えるにつけ、マリヤの苦しみと悩みは、わたしたちの想ぞうを超えたものであったにちがいありません。

しかし、最後にマリヤは、「お言葉どおり、この身になりますように」と告白し、神の言葉を受けいれました。一体マリヤをどのように決断させたものは何だったのでしようか。それは、悩み、苦しみをもったままの自分を、そのまま、神の言葉にかけ、ゆだねたという信仰によります。決してマリヤは喜こんですすんで、ゆだねたものではありません。不安を一ぱいもちながらそのまま、まかせたのです。苦しみが、悩みが消えて無くなったのではありません。それがあるままの自分をゆだねたのです。それは、つらく、苦しい神の事業への参加のはじまりでありました。三十五年後には、イエスの十字架の前で、絶望に涙し、打ちひしがれるに至るのです。そして、あの神の言葉にかけたことが全く誤りであったと思つた時、マリヤは、イエスの復活の出来ごとに出会い、そこではじめて神の深い

ご計画に眼ざめるのです。マリヤは三十五年目に信仰の確かさを体得したのです。

28

「客間には、彼らのいる余地がなかった」

(ルカ福音書 2章7節)

イエスはユダヤのベツレヘムという村の馬小舎の中でお産れになりました。それは母マリヤと父ヨセフたちの旅の途中の出来ごとであったのです。

当時、人口調査があり、人々はみな登録をするために、それぞれ自分の生れた村に帰って行きました。イエスの父ヨセフ達もガリラヤ県のナザレ村を出て、ユダヤ県のベツレヘム村へと登録のため帰っていったのです。その道程は百十キロもありました。身おもだつたマリヤには、大そう身にこたえる旅だったにちがいありません。

ようやく、ベツレヘム村にたどり着いたヨセフとマリヤたちでしたが、日は暮れかかり、

おまけに、すべての旅館は人々で満ち、宿る所はどこにもありませんでした。仕方なく、ある家の人にしたのみこんで、馬小舎で一夜を明すことになったのです。おそらく、その夜は遅くまで、旅人たちが宿る旅館では歓楽の音が村中にひびき、ひっそりとした馬小舎のヨセフとマリヤたちのもとにも聞えて来たことでしよう。彼らは、誰一人として、ヨセフとマリヤの存在など気にもとめなかったことでしよう。

やがて、その夜、人々が深い眠りに在るとき、イエスは産れ出で来られたのです。

ただ、熱心に求めていた東からの博士たちは、はるか遠くにいて救い主の到来を知り訪ね来たってめぐり会いました。また、当時賤しいとされていた羊かいたちに、救い主の到来が告げ知らされたということは、それ自体意義深いことであると思えます。

ひるがえって思うに、現代の人々の心の客間にイエスのいる余地はあるだろうか。多くの人々は己が歓楽のために日をついやし、深い眠りにおちいつているのではないでしようか。

「あなたは、多くのことに、心を配って思い
わずらっている。しかし、無くてはならぬも
のは多くはない。いや、一つだけである」

(ルカ福音書 10章41・42節)

たしかに、わたしたちは日^ひ日^び、多くのことについて心を配り、いろいろと思わずらい
つつ生きています。

しかし、それらの思いわずらいを、一つ一つ手にとってみつめ、確かめて見つめ考え
みますと、「思いわずらう」ほどのことがらでもない、と思えて来ます。

どうでもよいことにカッ・カッして怒り、よく考えたならば馬鹿気たことで悲しんだり、喜
こんだり、安心したり、不安になったりしているものです。そして、あれも必要、これも
必要と思ったりします。

しかし、イエスは人間にとって、無くてはならぬこと、即ち思いわずらい、心を配らね

ばならぬ一大事は一つだけだ、と申されるのです。一大事とは仏教用語ですが、その意味を聖書的に申しますと、人生についての神の真知をあらわす仕事、又は人生の真実なすがたを開きあらわす仕事ということです。

イエスは「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と申されました。パウロは「いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛であり、このうちで最も大いなるものは愛である」と申しています。

結局、人間の生にとって、なくてはならぬ大切なこと、一大事とは神の愛を知ることであり、神の定め給うた人間の在り方になつた愛に於て相互にかかわる、ということだと思ひます。

生きるとは、人とかかわりに生きるということであり、そのかわりに於て人は幸にも不幸にもなるわけです。そして、そのかわりを、幸いなものにするところこそ、神の愛を知ること、神の真知に生きるところに生れて来るのであります。

「人のいのちは、持ちものにはよらない」

(ルカ福音書 12章15節)

「人はパンだけで生きるものではない」とイエスは申されました。それは、自らが配慮するパンによって、ひとは生きるのではない、ということなのです。たしかに、自らが配慮するパンによって、自分が生きている、と思ひ込んでいる者は愚かであります。

私たちは、自らが配慮するパンによって生き得るのではなく、それ以前に、先ず、神のお恵みがあり、そのお恵みによって生かされているのであります。自らの生の根源に、自らの生の奥義に目を注ぐことをイエスは教え、求めておられる。それ故に、先の言葉につづけて「神の口から出る一つ一つの言葉によって生るのである」と申されるのです。

自らが配慮するパンを含めた一切のことが「持ちもの」なのです。「人のいのちは、持ちものにはよらない」のです。「いのち」とは「豊かで充実した、しかも平安なる人生」のことです。

地位や名誉や財産や権力……これらが「持ちもの」なのです。これらの持ちものが自分の人生を本当に平安にし豊かにし、充実させると思い込んでいるのが私たちです。故にこれについて自ら配慮し策をねり、努力する、ひとの目がそこへのみ注がれている。

問題なのは、結局ひとが、いつもどこに自分の目を注いで生きているか、ということです。自らが配慮するパンを含めた一切を超えた神の恵みを、自分の存在の根源にしっかりと見て、それに目を注ぐこと、その人こそ、本当に「いのちに生きる」人となるのであります。

31

「人には、できない事も、神にはできる」

(ルカ福音書 18章28節)

「人事を尽して、天命を得つ」という、ことわざがあります。人の限りを尽したうえで、

あとは静かに、天命にまかせる。という意味です。これは、はじめから天命にまかせているわけではありません。人事をつくした者のみ、天命にまかせられるということです。こちらがわで、何の努力もせず、ただ天命というむこうがわにまかせることは怠惰の一言につきます。

表記の聖句に於ても、ことからは同じです。何もしないで「神には出来る」と言う者の言葉は偽りです。自からその能力をふりしぼって努力した人間のみが、「人には出来ない事も、神には出来る」と言い得るのです。このような人のこの言葉を笑う人は、未だ、人生の何たるかを全く知っていない人だと申せます。なぜなら、人は人生に於て、人が決して万能でなく、人知をはるかに越えた出来ごとやことがらに数多く直面するからです。それは、常に説明不可能であり、いわく言いがたきものだからです。しかし、説明不可能、言わく言いがたきものなるが故に、それが神にかかわることがらだ、と言うのではありません。しかも、やがて、それらも人に出来るようになってしまいうだろう、といった程度のことではありません。

「人には出来ないこと」とは、正に「人に出来ないこと」なのです。これを人が人生に於て知り、見たときに「神には出来る」と告白するのです。「出来る」ではなくて、「して下さる」ということです。

32

「恐れるな、小さい群よ。御国を下さること
は、あなたがたの父のみところなのである」

(ルカ福音書 12章32節)

「御国」とは「神の慈悲深い御手の及ぶところ」ということです。いうなれば、吾が子に対して目をかけ、手をかけ、心をかけている親の思いと行為の及ぶところ、ということであり、この「御国」が、自分のうえにも及んでいることに眼覚めること、それが信仰の喜びであります。

「御国」のお恵みにかかわらず、それらを超えて大きく包んで下さる大慈悲深き愛なのであります。

「わたしたちが罪人である時、わたしたちの救いのために、キリストが死んで下さったことよって、神は、わたしたちに対する愛を示されたのである」(ロマ書5・8)

わたしたちが善人なるが故にではなく悪人なるが故に、目をかけ、心にかけ、手をかけて救うて下さる。このお恵みは過去も、現在も永遠の将来に於て変らない。死んでも生きても変らない。それ故に「恐れる」ことはないのであります。ここに信仰者の力の源泉があり、忍耐の源泉があり、又希望が生ずる所以ゆゑがあり、平安であり得る理由があるのであります。

人の世は、いつも大集団を誇り、大集団に最大の力を見、大集団を恐れ、自から大集団たらんと欲します。しかし、大集団の落ちる最大の誤りは、自からの力えの過信であります。大集団こそ我らが神だと思ひ込むことであります。そのとき、大集団は神の恵みから遠く離れた悪魔性を備えた集団と化するのであります。

わたしたちは、その集団の大なる故に誇る必要はない。それによりたのもうと思うこともない。さらに、その集団が小さき故に恐れ、不安に思うことはさらさらいらぬ。問題は、その群が神の御国の内に在ることを信仰によって、しっかりと見知っているかということにあります。

33

「だれでも、父・母・妻・子・兄弟・姉妹・さらに自分の命までも捨てて、わたしのもとに来るのでなければ、わたしの弟子となることはできない。」

(ルカ福音書 14章26節)

これは、きびしい言葉です。

イエスの弟子たらんとする者の条件は、父を捨て切れる者。母を捨て切れる者。妻子を捨て切れる者。否、そのみか、己れ自身の命までも捨て切れるものでなければならぬ、ということです。

しかし、イエスは弟子たらんとする者に、その父母を、その妻子を求めていられるのではない。イエスが求めていられるのは、弟子たらんとする者のイエスに、即ち神に対する全き信頼であります。

イエスの愛、神の恵は、「今日生えていて、明日炉に投げ込まれる野の草にさえ及ぶ」のであります。どうして、その父が母が妻子がどのようになるかと、かまわずに捨ておき給うことか、この神の慈愛に全き信頼をもって、神にのみ、イエスにのみ従う、その信仰を弟子たらんとする者に求めていられるのであります。

信仰とは神への絶対の信頼の一事につきま。

「わたしが来たのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである」(ヨハネ10・11)
とイエスは申されます。この御言葉のゆえに、父のこと母のこと、妻子のこと己れ自身の

こと、それについて思いわずらう、その一切を、慈愛の神の中におあずけするのです。おまかせするのです。

この信仰を、己れの存在の一番深いところに確かにもっている者こそ弟子なのであります。

この信仰に生きる者には不安はない。

34

「すべての人を照す、まことの光があつて、
世に来た」

(ヨハネ福音書 1章9節)

すべての人々が照されている。その日や、その時の気分、利害得失の感情で、照したり、照さなかったりするのではない。いつも、いつまでもいかなるときも、どのような状態に

あっても照らしてください。これが神のまこと、神の愛、まことの光りなのです。

「天の父は、悪い者の上にも、良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも、正しくない者にも雨を降らして下さる」まさに「一切の群生、光照をかうぶる」であります。

しかし、我々は、この神の恵みのもとに保持されていることに全く盲目であります。これまさに「忘恩」の一言につきる。

イエスは、この見えない神の恵み、神の愛、神の光りそのものの形、具体、具象として生き給うたのです。イエスは神の愛そのものなのです。

イエスの生涯の一つ一つの人に對する関わりは、神の愛の人に對する現示であり、語りかけなのです。

私たちは、イエスを見て、道徳や倫理を学びとるのではなく、自分に及ぶ神の愛と恵みの大きさを見なければなりません。そして、その恵みと愛に對する、自分の忘恩生活に深い悔いをいだかされるのです。

「世は彼を知らずにいた」と表記の言葉につづけてヨハネは記しています。

神に保持されていることへの感謝、神に保持されているが故に平安であること。

この神に対する感謝、讚美こそ、礼拝の内容であります。それ故に礼拝は特別なことではなくすべての者が、当然為すべき人の道なのです。いただきものをして、「ありがとうございます」と言わぬ者は「愚か者」であります。

35

「きてごらんなさい。そうしたらわかるだろう」

(ヨハネ福音書 1章39節)

わたしたちを、神のお恵みのうちに招かれるのにイエスは「きてごらんなさい、そうすれば、わかる」と申されます。あるいは「わたしに、従っていらっしゃい」と申されます。よくよく考えてみると、神のお恵みの座へ人々を招くには、これ以外に言葉は何一つな

いのではないかと思います。

神のお恵みの世界などというものは、人が言葉でもって説明することができるような世界ではありません。それは、頭で理解できる世界ではないからです。それは、個人が、その魂の奥に於て感得し体得するものであります。

にもかかわらず、多くの人々は自からの頭で理解しようとし、納得しようとして、先ず、くどくどとその説明を求めます。自からの勝手な思いで反論もします。そんな場合、結局その中心が全く見えないまま、中心の周辺をぐるぐると幾度も幾度も廻って、全く無駄な論議に時間をついやすことになってしまいます。

神のお恵みの世界への唯一の道は「きてごらんなさい」と申されるイエスの言葉を信じて従って行くしか他に、どのような道もありません。信じるとは、行為をすることです。色々と考え、様々に想う、その考え、想いをすてて、「来い」と申されるお方を、ひたすら信じて行為すること、そのとき神の恵みの世界、信仰による世界が眼前に開けて来るのであります。

しかるに私たちは、自己の考え、自己の想いに止まって、神の恵みの世界を自分のもとに引きよせようとしている、それは信仰ではありません。

36

「イエスは母に言った。『わたしの時は、まだきていません』。

(ヨハネ福音書 2章4節)

日常、わたしたちは、自分の生活について、あれこれと計画をたてて生きています。その場合、自分の体験から得た知恵・書物や他人から学びとった知恵などを用いて、賢く計画を予想して、それにもとづいて明日を先きどりして、歩み進みゆくということは、とても大切なことでもあります。そのことがよく出来ない人は、いわゆる愚かな人であると言えます。

しかし、人生に於ける出来ごととは、どれほど、その人が自分の知恵を賢く働かせて計画をたて、予想をしてみても、全く思いもかけない出来ごとが、正に青天のへきれきのごとくに生じることがあります。即ち、「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったこと」が、思いもかけない時に生じることがあります。これらのことについて、前者を「人の時」と言い、後者を「神の時」と申しますならば、わたしたちの人生は「人の時」ですべてが為され、進んでいるように思いますが、実は、「人の時」ではどうも思いはかることの出来ない「神の時」が、「人の時」を、あたかも支えるようにして、すべてのことは為され、進んでいるのだと申せます。

従って「神の時」が来なければ、神によるすばらしい出来ごとは何一つ生じない、と言えます。「人間の時」は、自分の欲によって生みだされますが「神の時」は、神のすばらしさに、人間をもあづからせようとする時です。わたしたちは、「神の時」に自分をゆだねて生きる生き方を信仰に於て学ばねばならないと思えます。

やたらと策を勞して、「神の時」を忘れ自から墓穴を掘るようなことをしてはなりません

「わたしの父の家を商売の家とするな」

(ヨハネ福音書 2章16節)

人に、安らぎと喜び、さらに希望と感謝を与えるものが宗教であります。

しかも、それは人の貧富、その他一切のことから全く関係なく、平等にお恵みとして無償(ただ)で与えられるものであります。

イエスは申されました。

「神は、悪い者の上にも、良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さる」(マタイ5・45)と、神の慈愛は常に、すべての人々に無

償で平等にのぞむのであります。また、「超日月光をはなちて塵刹（じんせつ）をてらし、一切の群生、光照をかうふる」即ち、この世のすべてのものは平等に、神のご慈愛の光りをいただいている。と親鸞も詠じています。

しかし、この世は、金あるもの、地位あるもの、権力をもてるもの、強き者が得をし、金なきもの、地位なきもき、権力もたぬもの、弱き者は、いつも損をし、しいたげられ、かえりみられません。たしかに、人が人に対してそうであっても、神が人に対する態度はそうではありません。

しかし、イエスが見られた現実の宗教は、金で平安を売り、物と救いとを交換し、欺きで希望を与えていたのです。神をたずね求めて来る貧しい善良なる民を、あたかも商人が客を見る目で、利得の対象としたのです。

それ故に、イエスは申されました「わたしの父の家を商売の家とするな」と。

これは、この世にある宗教への痛烈なる警醒けいせいであると共に、正しい宗教の在り方の提示であると思えます。自からかえりみると共に今日の宗教の在り方を深く考えてみたいと思

います。

38

「だれでも、新しく生れなければ、神の国を
見ることは出来ない」

(ヨハネ福音書 3章3節)

神の国を見ることが出来るのは、新しく生れたものだけである。とイエスは申されます。
神の国とは、神のお恵みに満ちた現実の世界ということですよ。

また、見るとは、体的に知る、ということですよ。

さらに、新しく生れるとは、今まで、ものごとにかかわって来た考え方を、なげ捨て神
のご支配を信じ、それに自分をゆだね感謝して生きる生き方、ものごとへのかかわり方の
生活をするのであります。つまり、古い生き方が自分のちからのみによつて生きる生

き方だとすれば、新しい生き方とは、神のご慈愛の支配を信じ、そのご慈愛の神に生かしていただく生き方だと申せます。

神のご慈愛に満ちた現実の世界は、イエスさまと共にわたしたちの足下に到来しているのであります。「神は……イエスを死人の中より、よみがえらせ、それにより、わたしたちを新たに生れさせて、生ける望みをいだかせ」て下さっているとペテロは申しています（ペテロ第一・一章三節〜五節）又、パウロも「イエスにあって神に生きている者であることを認むべきである」（ロマ・六章八節〜十一節）と言ひ、さらに「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである」（コリント第二五・一六〜一八）と言ひまっています。

わたしたちもパウロが見、ペテロが見た、この神のご慈愛に満ちた現実の世界を見たいと思う。しかし仲々それを見ることが出来ません。なぜでしょうか。どうすればよいのでしょうか。それは、イエスによって語り示された神の現実の愛とそのご支配を見つめつづけるとき、それを得るでしょう。

「神は、そのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは、御子を信じる者が、ひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」

(ヨハネによる福音書 第3章16節)

“わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のために、あがないの供えものとして、御子をおつかわしになった。ここに愛がある”(ヨハネ第一の手紙4・10)とヨハネは申しましたが、それは、人間から神への愛ではなく、神が人間を救ってやろうとして、人間にかけられた願い、その願いのあらわれが、ほかならぬイエスそのものなのです。

人間を救うてやろうと願う神の人に対する願いごころはイエス・キリストに於て、具体的にハッキリとあらわして下さったのです。ですから、イエスの一挙一動がすべて神の人

への願いごころを現わしているのです。

イエスによって、神の教えを学んだり、人の生き方の模範を学んだりするのではなく、イエスによって神が人に対して、どれほどの願いごころをもっているかという事実をよく見ることこそ大切なのであります。この神の事実を真実として、こちらも真実をもって信じ受けとること、これが信仰なのであります。

また、神の人間への願いごころをイエスに於て見ることにより、その愛に目もくれずに過して来た己が日々の有様を謝して心を動かされる（感とは心が動くということ）ことが「感謝」なのであります。そして、この感謝の姿こそ「祈り」にほかなりません。祈りの態は「合掌」であります。人間は合掌に於て、自分を本当に見出すことが出来るのです。さらに神の愛をいよいよ深く感知されるのであります。

「わたしが与える水は、その人のうちで泉となり永遠の命に至る水が、わきあがるであらう」

(ヨハネ福音書 4章14節)

出会って語り合った後に、ほのぼのとした喜びを残してゆく人がいます。不安な心に安心を、悲しんでいる心に希望を、ゆがんでいる思いに反省と正しさをもたらしてくれる人がいます。

「あゝ、この人に出会ってよかった」と感じる人がいます。イエスさまに出会うということは、こういうことだと思うのです。私は今、つくづく、イエスさまにお出会い出来てよかったと感謝しています。

サマリヤスのスカルという井戸辺で、不幸な女がイエスさまに出会います。いろいろと話してゆくうちに、彼女は、自分が今迄数多く出会った人と全く異なるということをイエス

に感じます。そして、この人は見知らぬ人だけど、自分の内なる重荷を全部、打ち明けても、それを暖かく受けとめてくれるにちがいない人だと信じるようになります。そのような人になったのは、彼女の生涯に於て一度もなかったことです。非難する人、さばく人自己中心的で他人の心など理解しようとしな人、自分にとって都合のよい時だけ友であり親切であった人、数々の裏切りを残して去って行った人、こんな人を彼女は、あまり多く見て来たし、体験もして来ました。

しかし今、スカルの井戸辺で出会っているこの男は全く、今迄の誰とも全くちがうことを感じたのです。

彼女の、ひがんだ心がいやされ冷えきり、かわききった魂が暖かくなり、心がうるおい、さらに、ほのぼのとした喜びと希望とが内に燃えはじめたのです。彼女は、イエスによって新しくされ、新しい世界を見せられたのです。

「お帰りなさい。あなたのむすこは助かるのだ。彼は自分に言われたイエスの言葉を信じて帰って行った」

(ヨハネ福音書 4章50節)

自分が相手から信じられている、ということを知るとは、わたしたちにとって、とてもうれしいことであります。考えてみると、人間関係の安定ということは、相互に信じ合うところから生れてくと申せます。それが証拠に、信じあうことが出来なくなつた人間と人間との間に他のどのような「もの」や「ことば」、「おこない」をもつて来ても、それらはすべて灰色に見え、味けなく、何の感動も興味も、そそりません。

しかし、信じ合う者同志の間で、相互に交わされる「もの」、たとえそれがわづかな「もの」であったとしても、相互にありがたく思い感謝が生じます。また、信じ合う者同志の間で、相互に交わされる「ことば」、それが、つたない言葉、であったとしても、慰めと

なり、勇氣となり、喜びを覚ゆるものです。

以上のことでわかるように、人間にとって「信ずる」ということがどれほど大切なことであり、同時に、「信ずる」ということがどれほどすばらしいことであるか、今わたしはつくづくとそのことを思うのです。

そして、イエスさまが、なぜ「疑う者にならないで、信ずる者になれ」と申され、「信じなさい」「信じて下さい」とまで言われたのか、その意味が、私なりに、よくわかるようになります。

信じないならば、一切は何も生じないし、起らないのです。疑いの中では、よきこと的一切は生じないのです。

信ずることによって、よきことが起り生ずるもと基が備えられるのです。「心に信じ、口に言いあらわして救はれる」本当にその通りです。

「主よ、水が動くときわたしを、池の中に入れてくれる人がいません。わたしが、はいりかけると、ほかの人が先におりて行くのです」

(ヨハネ 第5章7節)

池の水が動くとき、まっ先に池の中に入った者は、必ず病はいやされた。病人たちは、水が動くのを待って、水が動くとき、われ先に、他人をおしのけ、入っていった。結局、強い者が入り、いやされ、弱くて立ち上ることすら出来ない。いわば、本当の病人、本当に助けを必要とする者は、つねに遅れ、敗れ、いやされることはできませんでした。

病人のだけれど、自分が第一で他人は第二・第三なのです。願いとしては、他人を第一としたいと考えるが、現実には、常に自分が第一なのです。この人間のエゴイズム、人間自身どうすることもできない、実に断つことを願っても、断つことが難き人の業であります。しかし、これを断つことを得ずして、人の世に幸福と平和とは、ついに来ません。

これを、人は断つことはできない、だから、人は常に不幸です。しかし、神の愛は、これを断ち、これを超えてくださる。

他人のエゴイズム、人間のエゴイズムに悲しみ泣く、この病人に、イエスは申されます。「起きて、あなたの床をとりあげ、そして歩きなさい」と。

神は、人が超えたくて、超え難い、エゴイズムを超えて関わり給う。

エゴイズムを超えて在り給う神を信じ見上げ、さしのべ給う慈愛の御手にすぎることは、何とありがたいことであろうか。唯、感謝あるのみ!!

43

「いやされた人は、それがだれであるかを知らなかつた。群衆がその場にいたので、イエスは、そっと出て行かれたからである」

聖書は、注意深く、その語られる言葉にそくして読みだして行かねばならぬものだ、ということを、最近つくづくとおもうようになりました。

今まで、わたしなりに、注意深く読んでいるつもりでしたが、やはり、ある先入観というか、自分で思い込んでいるイメージと申しますか、とにかく、わたしの考えや想いが、先にあって、それにもとづいて、聖書から聴きだすのではなく、聖書の中へ読み込んでいたように思います。

イエスさまは、ベテスダの池に横たわる一人の病人に、そつと近づき、その人と交わり、その人に語りかけられたのです。そして、その人の病をいやされたのです。そのことが、周囲の誰れにもわからないほどの静けさと、その人との深い交わりに於て。

このイエスさまの病人にかかわられる様子を、表記の聖書の言葉から理解出来た時、わたしには、それは全く新しい発見でありました。そして、正に、ここにイエスさまらしい

お姿を見出し、そのイエスさまの深き想いをかゝりま見るのです。

いつも、イエスさまの行為、とりわけ、そのいやしは、イエスさまが、そう望まれずとも、群衆注視の只中で行われたように考え、思い込み、ペテスダの池でのいやしも同じ場面を想い浮かべていたわたしであったこと。未だまだ、読み込んでしまいがちな自分を深く反省した次第であります。

44

「イエスは、人々を、すわらせなさい、と言
われた」

(ヨハネ福音書 6章10節)

人には、出来ることと、出来ないことがあります。

出来ることは、全力をつくしてやる、そして、後は神さまにおまかせする。

大ぜいの群衆を目の前にして、彼らの為に食事を用意したいとイエスは思われる。

「どこからパンを買って来て、この人に食べさせようか」。イエスさまは理屈やではありません。観念論者でもありません。イエスさまはいつでも、どこでも、実際的です。その愛は具体的であります。

しかし、イエスさまの愛は人々の欲に応じてホイホイと与えられるものではありません。人の欲に依じて、ホイホイと与えられる愛は、人をますます欲深くさせ、努力せずして与えられるから、人を怠惰にさせるだけであります。

大ぜいの群衆を前にして、弟子たちに、この大ぜいの人々に食事を、どのようにすれば与えられるか考え、努力してみなさい。とイエスは申されるのです。

弟子たちは、さいふの内を見て計算します。また、人々に呼びかけ、さしだされたパンとさかなを群衆の数で割ります。つまり、弟子たちは自分達の出来るかぎりの知恵と努力を出し合います。でも、どうすることも出来ません。

人々が、どうすることも出来ないその時に、イエスは「人々を、すわらせなさい」と言

われるのです。

弟子たちや、人々の想いをはるかに超えた、神のご慈愛の働きの現実が眼の前にもたらされる。

神のお恵みの支配は、人々が立って、ヤイノ、ヤイノとさわぎたてている内には見えな
いし、現れません。黙して、すわる時、それは現成して来るのです。

45

「あなたがたが、わたしを、たずねてきてい
るのは、しるしを見たためではなく、パンを
食べて満腹したからである」

(ヨハネ福音書 6章26節)

このイエスさまの言葉は、まことにきびしい。

しかし、イエスさまは怒って、このように言っておられるのではなく、深い悲しみ、それも、相手に対する深い同情と哀れみの思いで語っていられるのです。

神の愛を語るイエスさまに熱心に耳を傾ける多くの人々に、神の愛の証として、パンを満腹するだけお与えになったイエスさま。多くの人々は、その後、イエスさまの言葉ではなく、イエスさまが与えてくださったパンを求めてイエスさまの後を追う。

パンは、神のご慈愛の一つのしるしでありました。パンをいただくことによって、神のご慈愛の確かさと深さを見て知るべきところを人々は、ただ、パンを食べて満腹した。そのことのみは一切の関心をうばわれて、パンのみを求めてイエスさまの後を追う。

この群衆の姿は、まことにあわれであります。この群衆とは、ほかでもなく、わたしであり、人間そのものの現実であります。

自分の利益につながる時だけの交わり、こんな交わりを世間の交わりである場合が多い、あの人が悪い、この人が悪いという以前に、人間の煩惱・人間の罪・人間の悲しさをつくづくと思う。イエスさまは、それを哀れに思ってください、その人間存在を救って下さる

うとするのです。

それ故に「命のパンを食べなさい」と申されるのです。「永遠の命に至る朽ちない食物を食べ」とおっしゃいます。それは、ほかでもなく、神の絶対的なご慈愛を信じ、それによりすがるといふことであります。イエスさまが語り、与えようとされるのはこれであり、宗教が与え得るものは、これしかありません。

46

「あなたがたが、わたしを尋ねてきているのは、しるしを見たためではなく、パンを食べ、満腹したからである。朽ちる食物のためではなく、永遠の命に至る朽ちない食物のために、働くがよい」

(ヨハネ福音書 6章 26・27節)

「花より団子」ということわざがあります。風流より実利の方がよい、という意味です。これは、風流心がないという意味ではなく、貧乏暮しに追われている者は風流をたのしむゆとりがないということなのでしょう。

しかし、ときとして、食うに困らぬ者であっても尚、花より団子を追い求めて止まぬ人がありますし、人間はついつい団子にまどわされ、「酒なくて何の己れが桜かな」と言動してしまふものです。

イエス生当時のユダヤの民衆も、乏しい生活をしていました。故に、花に気がつき、その美しさ、すばらしさを見て、神のお恵みをたたえ、感謝する以前に、目前の腹を満してくる団子に心引かれてしまったのです。彼らは、パンの故にイエスに聞き従おうとしたのです。自分の腹を満腹させてくれるイエスであるが故に、その満腹のためにイエスをたたえるのです。

団子だけ見て喜び、満腹であることにのみ止まり、それ以上のことをそこで見ようとしない民衆の思いに、イエスは悲しくなられる。否、そのような心にあわれみを感じられ

る。

「パンを食べて満腹」したことは、一つの神のしるしだということです。ここに神の愛がある。「これほどまでに、人々を愛し、支え、思いやって下さる神の愛とお恵みとが身近にある」。この神の愛のしるしは、「パンを食べて満腹」したことだとイエスはおっしゃる。このしるしをそこで見ることを願われる。

しかし、民衆はパンのみを見、満腹だけを考えて、それ以上を見ようとしないうちに、考えない。人はいつも神の愛に盲目である。申訳ないと思う。

47

「わたしの教えは、わたし自身の教えではなく、わたしをつかわされたかたの教えである」

(ヨハネ福音書 7章17節)

イエスさまは、自分の教えを語り、行動し、その結果、自分の主義や主張に殉じられた
のではありません。

自分の主義や主張に殉じることほど、自己主張の強いことはありません。

この世の多くの論者は、結局、自己主張であるものがほとんどであります。これは宗教
に於ても決して例外ではありません。神を語りつつ、その実は、自己の意見や主張を、つ
まり、自分自身を語っている場合があるのです。神を語るという「敬虔の仮面」をつけて、
その実は、自分を語る、という輩が何と多いことでしょうか。

「杯の外側はきよめるが、内側は貪欲と放縦とで満ちている」と言って律法学者、パリ
サイ人など当時の宗教家を自認している人々の偽善性を指摘されました。

イエスさまは、神について自分の考えや意見を教え語られたのではなく、神を語り、神
を生きられたのです。神を語り、神を生きるとは、ひとのために自分をささげる、という
「愛」につきまします。「わたしは、良い羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる」
とイエスさまは申されます。

神を語るといふ「敬虔の仮面」をつけて、自分を語ろうとする者が最もおそれることは、自分の栄光を全く求めず、ただひたすら神を生きる者に出会うことであります。そのような人は「教団」の枠の中に入るには、あまりに大きくて、はみだしてしまふ。それはあたかも「神が宮に住まれない」ごとくに。

本当に、神のみこころを求めて神に生きようとする者は、必ず、その宗団や宗教、信仰の人からのものか、神からのものか、その判別することが出来る。(7・17参照)

48

「だれでも、かわく者はわたしのところに来て
飲むがよい。わたしを信ずる者は、その腹から、
生ける水が川のように流れて出るであらう」

(ヨハネ福音書 7章38節)

わたしたちは日常、自分が手で触り、目で見、耳で聞き、鼻で臭ぎ、舌で味うことができる。ところがらのみが、本当に存在していると思ひ、そのみが現実の世界だと思つています。

しかし、現実の世界は、それのみでなく、今一つ目、耳、鼻、舌、手などで確かめられない世界が現実にあるのであります。それは心で感じる世界と申しましょうか。又は靈で触れる世界と申しましょうか、とにかく、わたしたちが誰れしも、ひそかに、心の内深くで慕^{した}い求め、願ひ求めている世界であります。

わたしたちの本当の安心ということは、先述の手や耳口目鼻などで感じる現実だけに生きていて得られるものではありません。つまり「物」に囲まれて生きているだけでは、わたしたちは本当に満足し、安心し、平安であることは出来ないであります。即ち、イエスさまが申される「かわく」とはこのことでもあります。正に、「人はパンのみでは生きることが出来ない」のであります。

イエスさまが語られる世界は、パンの世界ではなく、わたしたちにとって、今一つの現

実の世界である心、霊の世界についてであります。そして、イエスキリストは、心・霊の満しを人間に与えることにより、人間を本当に現実の世界に生きている者とならしめようとされるのであります。

そのために、先ず、手で触れ目で見、耳で聞え、舌で味い、鼻で臭ぐことが出来る方法でもって、手目耳……などで触れ得ない「愛」「喜び」「平安」「希望」などの世界に導き、心・霊の世界に眼ざめさそうとされるのであります。つまり触れて知る世界でなく「信じて」知ることを教え給うのです。その時人はついに自分の命の根源である神の愛そのものに開眼せしめられるのであります。

49

「あなたがたの中で、罪のない者が、まず、この女に石を投げつけるがよい」

ある一つの主義、ある一つの教えなどを絶対化し、それを基準にして、人間を含めたすべてのことを判断することほど、人間にとって恐ろしいことはない。ある一つの主義を絶対化し、それを政治のうえで行使するとき、一党独裁になって、それ以外の政治的な発言を、一切悪として裁ばいてしまうことになりましたし、ある一つの教えを絶対的真理として崇めるようなことが、宗教のうえでおければ、他の教えをもつ宗教は、すべて正しくなく「悪魔の教え」のようにしてしりぞけられ、否定してしまうことになりました。

このような恐ろしいことがらが過去のわたしたちの歴史の歩みの中で数多く起り、悲しい結果をもたらしましたし、現に、一つの主義や主張、教えを絶対視して、それにおどらされていいる人々が、わたしたちの身近にあるようです。

自分の目の前にある白い色を、主義や主張や教えの故に、白と見ないで赤とみたり、黒と見るようになる、その感覚や考え、それに伴う行動が恐ろしいのです。見るべきものを

見ないで、主義や主張や教えに「われ」も「ひと」もふりまわされてしまふ。そして、ふりまわされてしまふことが最大の善だと思ひ込んでしまふ。全く自分を失つたなまざけない姿になつてしまふ。

もちろん、自分の考えを何一つもたず、多くの人々の動くままに右へ左へと、ゆれ動く人々もなまざけない姿ですが。

あるべきものを、あるがままに素直に見ること、白を白と見ること、この謙虚さこそ「愛」であります。愛のまなざしこそ、イエスさまが与えてくださるものであります。表記の聖書の言葉はそのところに立ち返らせようとする言葉です。

50

「あなたがたはこの世の者であるが、わたしはこの世の者ではない」

この世は、うつろいやすく無常であります。旧約聖書の伝道の書は次のように、この世について語ります。

「世は去り、世はきたる……日はいで、日は没し……風は南に吹き、また転じて、北に向い……海は川に流れ入る……目は見ることに飽きることなく、耳は聞くことに満足することがない……空の空、空の空、いっさいは空である……」(1章1/8) この世がよいとかわるいと云っているわけではありません。この世の現実が、まぎれもなくこれなのだ、ということなのです。泣いても、笑ってもわたしたちは、この世の者として、この現実に生きつづけなければなりません。それ以外に絶対に生きるすべをもたないのです。その意味で、わたしたちは「この世の者なのです」。

しかし、イエスさまは「わたしは、この世の者ではない」と申されます。この世だけしか見えず、この世のことだけしか考えられない、この世にしばられた、この世の者である

わたしたちの只中で、「わたしは、この世の者でない」と申されるお方が、この世でない
思い、この世でない世界を語り示して下さる。それ故に、もし、この世の者が、この世で
ないお方の言に、その耳を傾けるならば、そのとき、はじめてこの世の者はこの世の現実
を見ることができ、知ることができるようになるのです。それは、暗の中にいる者が、光
りにはじめて出会うことにより、自みづかからの世界が暗であつたと知ることができるようにな
るのと同じです。

暗の中にのみいる者は、暗であることをも知らず、暗の中で死に絶えてしまいます。し
かし、光りを知った者は、自みづかからの暗の世界をも知り、更に暗から脱して、光りの世界に
往きて生きるように、光りにより導かれるに至ります。